

宮西高校同窓会報

— 発行 —
愛知県立
一宮西高等学校
同窓会

発刊の辞

同窓会長 山内 進

同窓の皆様方におかれましては、それぞれの分野において責任ある立場にて活躍の事と御拝察申し上げます。当西高も昨年創立二十周年記念式典が皆様方の御協力のもとに盛大にとり行なわれ、それと並行して同窓会名簿も十年ぶりに発刊され、皆様方のお手元に届けられた次第であります。そしてこの度、これを契機に同窓会報の発刊の声が持ち上がり、

色々と相談・検討の結果ここに発刊の運びとなり皆様方のお手元にお届けすることとなりました。さて今日我々を取りまく社会はかつてない変化と発展を続けてまいりましたが、皆様もすでに周知の通り中東戦争に依る石油危機に端を発した世界的経済の狂乱は、私達の生活にただならぬ影響を与えてまいりました。これからの二十一

『知的好奇心をいつまでも』

校長 柘植敬一郎



昭和52年開校のご当地・尾西高校を経

ては、どのような西高生を創りたいか、所懐の一端をもってご挨拶とさせていただきます。

それに先立ち、昨年、本校創立20周年記念式典を終えて、機ようやく熟し、ここに、『同窓会報創刊の運びとなりました。ご同慶の至りであります。

西高をどのような学校にしたいか、ひい

世紀を考える時、不確実性あるいは不透明の時代と言われ予測することはなほだ困難なことでありますが、「未来の兆しは現在にある」の視点に立ち、深刻さを増すであろうエネルギー問題、複雑な様相を呈する国際社会、国内的には高齢化社会への波、又教育問題等々今後日本が生き残るための苦悩の時代が予測されます。こういった厳しい社会情勢の昨今、当西高の卒業生の集まりである同窓会という組織を通して自己研磨をはかり、友情を深め対処していかねければならない時だと痛感いたします。こうした意味でこれから一年に一回の同窓会報を通してお互いのコミュニケーションを計るということは大変意義深いものがあると信じます。

同窓会に思う

前教頭 鈴木 友一

西高も今年で創立満二十年を経過しました。が、昔風に言えば二昔です。この三月には全日制は十八回、定時制は十六回の卒業生が社会に出て行きます。従って西高同窓会も、その規模においても、その数においても、いよゝ発展期にさしかかったと思えます。誠に喜ばしい限りであります。

ところで、同窓会の皆さん、同窓会にどうかが、幾つになっても、未来について知りたい、知的好奇心を失なわれない皆様であって下さい。西高生であっていただきたいものです。いつの日か、遠い将来、子どもの前で、孫の前で、教養ある人間として死ねる皆様で、西高生であって下さい。

かつて、東京大学総長・大河内一男先生が、その卒業証書授与式・式辞にお書きになった(しかし、いささかキザだ)ご自身お思いになってか、式ではおっしゃらなかつた幻の名セリフ、「ふとった豚になるよりも、やせたソクラテスになれ」を文字で申し上げましょうか。そうです。どうか、「適当にふとったソクラテス」になってください。皆様も、西高生も、そのための、飽くなき知的好奇心であります。

おわりに、暑中お見舞い申し上げます。

て一体なんでしょう。か、私はこの頃、同窓会というものの意義とか、価値というもの、の深さを特に感じさせられて、います。そこで、他校の行われている同窓会の様子を聞いてみますと、最近の傾向として、そこに、「二、三の特色があるようです。その一つは、同窓会の出席者が年々歳々多くなつてきているということ。これは何を意味しているのでしょうか。次は、まだ同窓会のない学校が、新しく同窓会をつくらうとする傾向が強くなつてきたことです。これも何を意味しているのでしょうか。

第三は、かつての先生が同窓会やクラス会に出席することが最近大変多くなつたことです。これもまた何を意味するのでしょうか。

以上がこの頃の同窓会の傾向についての特色ですが、なぜそうなつたのかは、一つの理由で説明することができません。昨今は物の時代から心の時代に移りつつあります。物の豊かさよりも心の豊かさを求めるようになったからです。文明社会における人間軽視に気づいた人間復興とでもいえます。極く簡単にいえば「人恋し」といいかえられましょう。そういう心が、こういう傾向をつくり出したように思います。

同窓会の皆さん、この世に沢山いる人間の中で、友達こそはあなたの生きる宝です。友情で堅く結ばれた学校友達こそ生きた宝です。心を開いて相談できる友達が沢山あることにこしたことはないが一人でも二人でもいいから持つて下さい。同窓会が心のより所、「人恋しい」場となることを祈っております。